

ていた。出るなりバスタオルでくるまれる。

「拭いたら服を着る」

「でもこれ、……浴衣は嫌だな」

差しだされたのは浴衣と新しい下着、それに使い慣れたヘッドホンだった。オレが身につけていた服は見えない。

ナオヤが一人暮らしを始めた時から、時々泊まりに行くとパジャマではなく浴衣を着せられていた。そういうのが好みなのだとナオヤ自身の服装やインテリアの趣味から判っていたし、オレも別に嫌いではないから文句は言つた事がなかった。けれど今は困る。

「何故嫌なんだ？」

「だってまた手錠、かけるんでしよう？ 裾とか袴とかさ、乱れたら直せないじゃないか。ナオヤだけならともかく女の子もいるのにそんな格好したくないよ」

「何だ、そんな理由か。乱れたら俺を呼べ。それで問題は無いだろう。あの服は焼き捨てたから諦めろ」

「は？ 横暴だよ。こんな状態でずっと監視されてさ、おまけに人の服を勝手に焼いたって？」

不意にナオヤに引き寄せられて抱きしめられた。オレはまだタオル一枚巻いたきりの姿だ。今度は何のつもり

かと顔を上げると、思っていたよりずっと真剣な、怒った表情のナオヤがオレを見返してきた。

「お前にあんな物を着せておきたくない」

「ナオ……ヤ……」

「そういうえばオレ、祈祷用に天使が用意した服を着てたっけ。」

それを嫌がるのはオレを好きだから？ 神が憎いから？

もしかしたら両方なのかもしれない。どちらも同じナオヤで、オレが救世主でいる事をやめない限り、彼はオレを見る度に神への憎悪を思いだしてしまう。そしてそれは彼が救済から遠ざかるのと同じだ。

「……これしか無いなら着るよ。放して」

結局渡された浴衣を着て、洗面所に置いてあつたドライヤード髪を乾かしてからまた手錠をかけられて部屋に戻つた。ミドリちゃんがオレの側に駆けてくる。

「ああっ！ アタシのシャンプー使いましたね？」

「ええっ？ 駄目だった？」

置いてあつた中から一番近くにあつたのを使つただけなんだけど。どれもその辺で売ってるメーカー品みたいだったし、普段からシャンプーの銘柄にはこだわらない